

社長令嬢、社内恋愛はじめます♡
無気力男と三段重とラーメンと

夜果堂書房／高瀬ザクロ

「——もう明日から来なくて結構です」

スマートフォンに届いた短いメッセージを見た瞬間、肩から力が抜けた。

まだだ。またアルバイトをクビになってしまった。

ファミレスでは注文を取り違えてお客さまに怒鳴られ、すぐにバックヤードに下げられた。皿洗いを任されたけれど、食洗機は何でもきれいにしてくれるものだと思いい込み、雑巾まで放り込んでしまい……機械ごと壊してしまった。

あのととき響いた大きな音。思い出すだけで、胸がぎゅっと縮む。

コンビニではお釣りを間違え、ブティックではお客さまの服にお茶をこぼした。

そして今回の牛丼屋さんも、やっぱりダメ。

本当に、どこへ行っても失敗ばかり。

……言い訳をするつもりはないけれど、それも仕方ないのかもしれない。

だって私は、生まれてからずっと箱入りのお嬢様として育ってきたのだから。

月曜は料理教室、火曜はお花、水曜はバレエ、木曜は英会話……。

広い屋敷の大理石の床をコツコツと歩き、習い事に明け暮れる優雅な毎日。

けれど最近、大学時代の友人たちが次々と結婚していき、パパやママまで「そろそろお見合いを」と机いっぱい写真を並べるようになった。

もちろん、私だっていつかは結婚したい。

だけど世の中のことも、恋のことも何も知らないまま結婚だなんて悲しすぎる。

だから私は、どうしても社会に出てみたかった。

もしかしたら、そこで素敵な出会いがあるかもしれない。

その思いだけで、私は無謀にも次々とアルバイトに挑戦してきたのだ。

シャンデリアの光が柔らかく揺れるリビングでパパとママがソファに並んで座っている。ママの膝の上には、ふわふわの白いマルチーズ——ロン。

「モモちゃん……またダメだったのね？」

私は視線を落とし、小さくうなづく。

パパはお見合い写真を手にしながら、やれやれと首を振った。

「モモちゃん、どうやって社会人になるつもりなんだい？ アルバイトだって三日と続かないんだぞ」

パパは額に手をあて、苦笑を浮かべる。

「そんな夢みたいなこと考えないほうがいい。モモちゃんは可愛いお嫁さんになるのが似合っているよ」

「そうそう。難しいことなんてしないでいいの。この人なんかどう？ 星菱商事の御曹司よ。素敵な方でしょう？」

ママは写真を差し出しながら、さらに言葉を重ねる。

「早く結婚して赤ちゃんの顔を見せてくれたら、パパもママも、もっと幸せよ」
私は思わず声を荒げた。

「そんな……知らない人と結婚なんてできない！」

私は唇を噛みしめ、精一杯の声を絞り出した。

「……一度でいいから、社会人っていうのをしてみたいの！」

「じゃあ……ちよつと働いたら“こんなもんか”って、諦めてくれるのかな？」

パパが苦笑混じりに問いかける。

「……わからない。でも、とにかくどこかの会社に就職します！」

私はスマホを取り出し、求人サイトにアクセスした。

「あつ、履歴書っていうのが必要なのね？ 数が多い方がいいのよね？ 高橋！
履歴書を十万円分くらい買ってきて！」

玄関近くに控えていた運転手の高橋に声をかけた瞬間、パパが慌てて手を振った。

「いやいや、モモちゃん。そんな仕組みじゃないんだ。履歴書を何十枚送ったって採用されるわけじゃないんだよ」

常識の壁にぶつかって、悔しきで目に涙が浮かぶ。

「……どうして私だけ、こんなにうまくいかないの」

ぼろぼろと泣き出してしまった私に、ママもパパもあたふたと立ち上がった。

「そんなに社会人をしてみたいんだね」

「そうなの？ 本当にそう思ってるの、モモちゃん？」

私は小さくうなずく。するとパパは深く息を吐き、静かに言った。

「……仕方ないね。じゃあパパの会社に来なさい。海外調達部に欠員が出たんだ。気が済むまで働いてみるといい。忙しい部署だ。長くは続かないと思うけどね」

「えっ……パパの会社？」

「モモちゃんをこんな世間知らずに育ててしまったのはパパとママの責任だ……。不本意だが、パパの会社で預かるしかない。ただしモモちゃん、絶対に会長の娘だとバレてはいけないよ。みなさん気を遣ってしまうからね?」

私は両手を握りしめて、飛び跳ねた。

「今度こそ本当に社会人として頑張ります! 早起きだって残業だって、なんでもできます! きつとパパもママもびっくりするくらい、立派に働いてみせます!」
私の声は、煌めくシャンデリアの下で朗々と響いた。

宝井モモの初出勤の日がやって来た。

この日の彼女はいつものブランド物ではなく、はじめてユニクロで揃えた普通のOL風のスーツに身を包んでいた。

シンプルな白いブラウスに、膝丈の黒いスカート。

背筋をぴんと伸ばすその姿には、緊張と誇らしさが入り混じっている。

「……私、今日から社会人なのね」

モモは黒塗りの高級車の後部座席で車窓に映る自分の姿を見つめた。

長年仕えてきた運転手・高橋が控えめに声をかける。

「お嬢様、大変恐れながら、普通のOLさんは、運転手付きの車で通勤なさることはございません。皆さまご自分で運転なさるか、電車やバスを利用されますので、このまま玄関に横付けいたしますと、どうしても目立ってしまいます……」

「まあ！ そうなのね。普通の人は車じゃないのね」

モモは目を丸くし、まるで新しい世界を発見した子どものように何度も頷いた。

「ありがとう、高橋。じゃあ、私ここから歩いてまいりますわ！」

バッグを抱え直したとき、高橋が小さく声を上げた。

「お、お嬢様、差し出がましいようですが……普通の〇さんはそのように高価なバッグをお持ちにはならないかと……」

モモは自分の手元を見下ろした。

大きなブランドロゴが、朝の光を受けてきらきらと輝いている。

「えっ……そうなの？ でも……どうしたらいいのかしら」

困惑する彼女に高橋は少し考え、そつと鞆を差し出した。

「もしよろしければ、こちらを。私のビジネスバッグでして、男女兼用ですから

……少し古びておりますが、目立たないと思います」

「まあ！　すごいわ高橋。これ、とても社会人って感じがするわ！　ありがとう！　私、これで頑張りますわ！」

勢いよくそう言って、モモはドアが開くのを当然のように待った。

高橋は、困ったように首を横に振る。

「大変心苦しいのですが……どうぞ自分でドアを開けてくださいませ。私が外に回って開けてしまえば、それだけで目立ってしまいますので」

「まあ！　そうなのね。普通のOLさんはなんでも自分でなさるのね。ご立派だわ！　私も見習わなくちゃ。では、行ってきますわね、高橋！」

モモはぎこちなく自分でドアを押し開け、ヒールの音を響かせながら歩き出した。その背中を見送りながら、高橋は小さくため息をつき、呟いた。

「ああ……お嬢様、心配ですねぇ。普通のOLさんは、車を降りたらまず、自分でドアを“閉める”んですけどね……」

——シャンデリアが輝く自宅とは対照的に会社は灰色で無機質だった。

「……ここが、私の社会人生活の始まりなのね」

高橋のビジネスバッグをぎゅっと握りしめ、私は調達部のドアの前に立った。

深呼吸をひとつ大きく吸って、恐る恐るドアを押し開ける。

何か機械のガタガタという音、誰かの笑い声、そして鳴りやまない電話のベル。雑然としていて、机の上には書類やファイルが山のように積み上がっている。

「あなたが今日からの新人さんね？」

きびきびとした口調の女性社員が声をかけてきた。

「は、はいっ！ 宝……いえ、ヤマダ・モモです！」

危うく本名を名乗りかけて、慌てて言い直す。

女性社員は机の上から紙束を取り上げ、私に差し出した。

「早速だけこれ、コピーお願い。会議で使うから、二十部ずつ」

「はい！ 任せてください！」

私は紙束を抱えて部屋の隅にある大きな機械へと向かった。

そして意気揚々と紙を揃えて差し込む――。

ガガガガッ！

ものすごい音を立てて機械が震え、止まった。

「ひゃあっ！ な、なんですか？」

慌てて後ずさる私の横に、だるそうな足取りで一人の男が近づいてきた。

ゆるんだネクタイ、ぼさぼさの髪、眠たそうな目。

「……お前、何やってんだ」

投げやりな声で男は機械を指差した。

「このシュレッダー、せいぜい十枚までしか入んねーぞ？ お前、なんでこんなに

一気に突っ込んでんの？」

「えっ……しゅ、シュレ……っ？　これ、コピー機じゃありませんの？」

背後から、鋭い声が飛んでくる。

「ちよっとアンタ！　コピー頼んだのに、なんでシュレッダーかけてんのよ！」

振り返ると、さっきの女性社員が私を睨んでいた。

「え、えっ……わ、私……間違えて……？」

「見たらわかるでしょ！　どうやったらコピー機とシュレッダーを間違えるのよ！」
オフィスの響き渡る女性社員の声。

「す、すみません……すみません……！」

苛立ちを隠せない女性社員は、すぐ隣に立っていた男へ視線を向ける。

「青木！　突っ立ってないで、間違ってたらさっきと教えてあげなさいよ！」

男は気だるそうに頭をぼりぼりかき、片眉を上げてぼそつと言った。

「いやあ……俺が気づいたときには、コイツもう突っ込んでたんすよ」

「……ふん！　どうだか知らないけど！　ほんと、いい加減にしてよね！」

女性社員は紙束を抱え直し、ぶつぶつ言いながらコピー機の方へ向かっていった。

私は小さな声で「すみません……」ともう一度呟き、視線を落とす。

その拍子に、隣に立つ男の横顔が目に入った。

だらしく緩んだネクタイ、眠そうな目。

私の視線に気づいた様子もなく、男は鞆を肩にかけ、片手をひらひらと振った。

「……んじゃ、外回り行ってきたーす」

それだけ言い残し、彼はあっさりと事務所を出て行った。

調達部で迎えるはじめてのお昼休み。

私が机にそっと置いたのは、金箔押しの立派な三段重。

お花見の席さながら、色とりどりの料理がぎっしりと詰め込まれている。

その瞬間、周囲の視線が一斉に私に注がれた。

「……ちよつと待って、それがお弁当？」

向かいに座っていた女性社員が、ぽかんとした顔で問いかけてくる。

「え、ちっちゃい頃から外国で暮らしてたとか？」

別の社員も不思議そうに首をかしげた。

私は一瞬きよんとしたが、すぐに帰国子女と思われた方が都合がいいと気づく。

「そ、そうなんです！ 日本暮らしはまだ短くて……」

とつきに口をついた嘘に、私自身も驚いた。

「だからちよつと日本語がたどたどしいのね。なんか、浮世離れしてると思った」

「日本に憧れすぎて、そんな豪華なお弁当ってわけ？」

半ばあきれたように笑われ、私はみるみる頬が熱くなる。

「ま、ママ……いえ、母が……張り切っちゃったみたいで……」

慌てて言い訳をすると、別の社員が柔らかに笑いかけてくれた。

「たぶん、お母さんがお弁当ってものを、ちょっと勘違いしてるんだろうね」

私は周囲を見回した。

どの机の上にも、小さなプラスチックの箱や、コンビニのおにぎり。

（あ……そうなんだ。みんな、あんな小さな箱がお弁当なんだ……私、お弁当って

三段重のことだと思ってた……）

恥ずかしくて箸を持つ手がかすかに震える。

私は生まれてはじめて大急ぎでご飯をかきこんだ。

午後からは、調達部のベテラン女性社員が社内を案内してくれた。

「奥が社員食堂、手前が資料室よ。取引先のデータは、だいたいここに保管されるから。青木が外回りに出たテック社のデータもここよ。大事な取引先なの」
何気なく口にされたワードに、わずかに胸が高鳴る。

コピー機とシュレッダーを間違えたとき、眠たそうな目で現れた男——青木。

私は小さなメモ帳に「テック社Ⅱだいじ◎」と書き込んだ。

「字、上手ね。すごいじゃない」

女性社員が覗き込み、軽く笑う。

私は、すっかり「帰国子女」だと思われていることを思い出す。

（お嬢様だと知られるよりは、よほど都合がいい……ふふ、これはラッキーかも）
胸の内でそうつぶやき、少しだけ気持ち軽くなった。

その日の夕方。

勤務を終えて調達部を出たモモは、外回りから戻ってきた青木とすれ違った。

「——テック社の納品、一旦ストップしたほうがいいですよ」

気の抜けたような声音だったが、不思議と確信めいた響きがあった。

しかし、その前に立つ年配の上司・木村は眉をひそめ、きっぱりと言い返す。

「何を言ってるんだ。テック社には『ロットごと納品』って何年も前から決まってるんだ。ストップだの減らすだの、お前が勝手に判断していいことじゃない」

青木は気怠そうに肩をすくめた。

「いや……でも、あそこ絶対『やっぱ要らない』って言うてくると思いますけど。だって——」

「だってクソもあるか！」

木村は苛立ちを隠さず、声を荒げた。

「もういい、黙れ！ お前の話なんか聞かん。今日だってどうせ成果出してないんだろ？ だったらさっさと帰れ！」

張り詰めた空気の中、青木は頭をぼりぼりとかき、ネクタイをぐいっと緩めた。吐き捨てるような言葉にも、反論ひとつせず。

「……んじゃ、おつかれっしたー」

場違いなほど気の抜けた声を残し、片手をひらひらと振って去っていく。

取り残された空気だけがぴりつく中、その姿は妙に軽やかで、逆に目立っていた。モモには、その背中がどうしても気になって仕方なかった。気づけば彼を追いかけ、ビルの出口で小さな声を振り絞る。

「あのっ……！ 今朝はありがとうございました！」

青木が足を止め、面倒くさそうに振り返る。

眠たげな目が、モモを上から下までゆっくりと見やった。

「……誰、アンタ」

記憶にないと言わんばかりの声音に、モモの頬がさっと赤く染まる。

慌てて言葉を継いだ。

「えっ……あの、今朝です！ シュ、シュレッダーの件で！」

一瞬きよんとした後、青木は小さく顎を引いた。

「あー……あれか」

思い出したように口を開き、ポケットに片手を突っ込んだまま彼女を見下ろす。

「コピー機とシュレッダー間違えるなんて……アホもいいところだわ」

ぶっきらぼうな一言を投げつけると、青木はネクタイを外しながら歩き出した。

「ま、気をつけな」

投げやりな声を残し、背中を向ける。

モモは深々と頭を下げたまま、その背中を見送った。

その夜の宝井家の食卓。

いつものように白いクロスがかけられた大きなテーブルに、温かなランプの灯りが柔らかに揺れていた。

銀のカトラリーが小さく音を立てる中、私は一日の出来事を弾む声で語り始めた。

「パパ、ママ。今日、会社で……少し、やっていけそうな気がしましたの！」

その言葉に、両親は顔を見合わせ、嬉しそうに目を細める。

「まあ……そうなの。モモちゃんがそう感じられるなら、ママは本当に嬉しいわ」
私は胸を張り、さらに言葉を重ねる。

「皆さん、本当に親切に教えてくださいましたの。わたくし、不安でいっぱいでしたけど……さすがパパの会社の従業員さんですわ、皆さん本当にいい人ばかりで！でも、パパと廊下ですれ違ったとき知らない顔をするの、とっても大変でしたわ」
その告白に、パパは目を細め、ゆっくりと息を吐いた。

「そうだな。パパも知らんぷりするのは大変だったよ。重そうな書類をみなさんと運んでいたね。よくやってると思ったよ、家ではなにもしないのにね」

「まあ……パパったら」

少し照れくさく笑みをこぼしたそのとき、背後から静かに足音が近づく。

お手伝いの坂井さんが、私のグラスにお茶を継ぎ足してくれた。

「あ、坂井さん。今日の三段重とっても美味しかったんですけれど、明日はもっと小さいお弁当にしていただけませんか？」

「かしこまりました、お嬢様」

坂井さんは微笑みながら頭を下げ、静かに食堂を後にした。

私は胸の前で手を合わせて両親に向き直る。

「明日も頑張れそうですわ」

——調達部はいつもにまして慌ただしかった。

予定していたテック社への納品が、突然「不要」と通達されたのだ。

「どうということだ！ もう梱包まで済んでるんだぞ！」

「スケジュールが全部狂うじゃないか！」

社員たちの声は荒くなり、空気はぴりぴりと張り詰めていく。

やがて怒りの矛先は、自然とテック社担当の青木へと向けられた。

「青木！ お前、なんで把握してなかったんだよ！」

デスクに肘をついていた青木は、だるそうに頭をかきながら口を開いた。

「……俺、言いかけたよ」

「は？」

「前に、テック社の担当がポロっと言ってたんすよ。奥さんが妊娠六ヶ月だって。だから今月あたりで産休に入って担当変わるんじゃないかって俺は思っていました。

担当が変われば納品スケジュールも変わる。俺、そう言おうとしたんすけど……？
木村課長に黙れって言われたから黙りました」

社員たちは互いに顔を見合わせ、誰も言葉を返せない。

青木はおもむろに立ち上がり、鞆を肩にかける。

「……外回り、行ってきた」

それだけ告げると、気怠そうな足取りでフロアを後にした。

「どうするんだ……」

「大元のアメリカのメーカーに確認しないと話にならないぞ」

「でも、英語で直接やり取りできる人間が……」

焦り混じりの声が飛び交う中、モモがおずおずと立ち上がった。

「あの……みなさん、お忙しそうですね。なにか私にお手伝いできることは……」

一人の社員が振り返り、苦笑を浮かべる。

「アンタには無理だよ。これはアメリカ本社との直接交渉なんだ。英語での商談だから」

モモは拳をぎゅっと握りしめ、勇気を振り絞った。

「わ、私……英語なら、話せますの！」

その瞬間、オフィスの視線が一斉に彼女へと集まった。

「そういえば帰国子女だったよな……！」

「頼む、山田さん！ これ伝えてほしい！」

差し出されたメモ用紙と電話を受け取り、モモは深呼吸をして受話器を握る。

次の瞬間、流暢な英語が彼女の口から淀みなく飛び出した。

普段のおっとりとした口調とはまるで別人のように、はつきりと、堂々と。

その声がフロアいっぱいに響き渡ると、社員たちは思わず息をのんだ。

数分後——モモは受話器を置き、ほっと息をついた。

「……大丈夫ですわ、あちらも事情を理解してくれました。スケジュールの調整も可能だそうですわ」

一瞬の沈黙のあと、オフィスに歓声があがった。

「おおっ……!!」

「助かった!」

モモは頬をほんのり赤く染め、深くうなずいた。

（やった……私、役に立てた……! 早く……青木さんに伝えたい!）

眠たそうな目で「アホ」と笑ったあの人に、今の自分を見てもらいたい。

モモの胸は熱く震えていた。

昼休みの調達部。

女子社員たちは弁当をつつきながら、ひそひそと噂話に花を咲かせていた。

「青木、帰り遅いよね」

「テック社のもう一人の担当と話つきたいんですよ。でも、あそこの担当者ってきパチンコ好きで有名じゃん？」

「ひょっとして駅前のパチンコ店で張り込んでるんじゃない？ ふふっ」

「電話出ればいいのにな。もう山田さんが解決してくれたのに、ほんとバカだわ」
モモは箸を止め、耳をそばだてる。

（駅前の店？ まあ……青木さん、そんな場所でお仕事なさってるのね！）

午後の休憩時間。モモはそっと会社を抜け出し、駅前へと足を運んだ。

パチンコ店の駐車場。一角に、見覚えのある白い社用車が停まっている。

「まあ！ やっぱり青木さん、いらっしやいましたのね！」

モモは勢いよく駆け寄り、窓を叩いた。

中では青木がシートを倒し、ぐったり眠っていた。

「青木さんっ！ チンコの前に立ってらっしやらないんですね！」

駐車場の空気が一瞬で凍りついた。

通りすがりの客が二度見し、苦笑しながら振り返る。

「青木さん？ チンコの前に立たれないんですか？」

「おいっ！ 声でけえんだよ！」

青木は慌ててドアを開けると、モモの口をその大きな手で塞いだ。

「黙れ黙れ！ パを省略すんなー！」

荒々しい声とともに押さえ込まれ、モモはふわりと鼻をかすめたタバコの匂いと、至近距離の体温に思わず胸を高鳴らせる。

そのままずると車内に引き込まれた。

「……お前、なんなの？　どういう嫌がらせだよ！」

「だ、だって！　皆さんがおっしやってたんです！　青木さんはチンコの前が張ってらっしやるって！」

「……俺、そんなこと言われてんの？」

青木は頭をぼりぼりとかきながら、シートに深く沈み込む。

モモはまだ心臓が跳ねるまま、その横顔をそっと盗み見ていた。

車内の空気がようやく落ち着いたところ、青木が不機嫌そうに問いかける。

「……で？　結局お前、何しに来たんだよ」

モモはきらきらした目で胸を張った。

「アメリカ本社とお話をしましたの！　納品ロット変更で合意いただけました！」

「……は？」

青木は彼女をまじまじと見下ろす。

「お前が……話、つけたのか？」

「はいっ！」

誇らしげに頷くモモ。そのあとに、小さく付け加えた。

「……その、私、日本語はちょっと怪しいんですけど、英語なら……」

その言葉に、青木の目がわずかに細められる。

「アホみたいな顔してんのに……やるじゃん」

ぶっきらぼうな声に、しかしほんの少し笑みが混じった。

「……サンキューな。助かったわ。俺が意地はったせいで混乱させちゃったよな」

その一言は、モモにとってどんな賛辞よりも眩しく響いた。

この一件以来、モモもテック社の担当を任されることになった。

モモは相変わらず天然ぶり全開で、場違いな発言をしては青木に口を塞がれる。

「いや、そこは黙っとけて……」

「えっ？　でも大事なことですわ！」

真っ直ぐで屈託のない笑顔は、テック社の担当者に妙に受けがよかった。

「モモさんって真剣なんだけど、肩肘張ってなくて安心するよ」

彼女の浮世離れた言葉は、不思議と相手の緊張を解きほぐしていく。

さらに海外とのやり取りでは、モモの英語力が遺憾なく発揮された。

その横で、青木は面倒くさそうにしながらも数字や条件を的確に整理していく。

モモの愛嬌と青木の調整力。一見ちぐはぐに見えて実は絶妙に噛み合っていた。

テック社との関係はこれまでになく良好になり、業績もさらに伸びていった。

その日、テック社との打ち合わせは、先方の指定で雑多な居酒屋で行われた。モモにとってははじめての場である。

メニューを食い入るように眺め、ビール瓶を両手で大切そうに抱え込む。

「どうぞ、どうぞ！」と慣れないながらも精一杯の笑顔を振りまいた。

「モモちゃん、気が利くなあ」

「いやあ、若い子がいると場が明るくなるよ」

テック社の男たちは上機嫌に笑い、次々と声をかける。

「もっと注ぎますわね！」

褒められて嬉しくなったモモは、ますます張り切ってジョッキを手にし立ち働く。その様子を、青木は黙って見つめていた。

打ち合わせの帰り。肌寒い風が二人の頬を撫でた。

「おい、アホ。さっさと帰るぞ」

青木が手短にそう言った矢先、モモの視線が路地の先に留まった。

ビルの影から、高橋が車の鍵を手に姿を現しかけていた。

（……ダメっ！　ここで迎えに来られたらお嬢様ってバレちゃう！）

モモは必死に目だけで合図を送った。

高橋は彼女の真剣な視線を受け取ると、肩をすくめて車へと引き返していく。

モモは、青木の腕を軽く引きながら、とっさに別の方向を指さした。

「ま、まあ……あれは何かしら？　ちょっと変わった車ですわね」

彼女が示した先には、幌を張ったラーメン屋台が灯をともしていた。

「んー、『んめー、ら』って……なんのことですか？」

「は？　『ラーメン』だろ、どう考えても。なんで右から読むんだよ」

「へえ……こういう匂いがするのですわね」

鼻をくすぐる湯気に顔を近づけるモモ。

「お前……屋台のラーメン食ったことねえの？」

「いえ、ありますわよ。パスタですわね？」

「いやいやいや……まあ、同じ麺類だけでも」

青木は呆れ顔でため息をつく。

「……食うか？ お前、さっきから腹鳴ってただろ。ろくに食わねえで、酒ばっか
ついでさ」

暖簾をくぐり、二人は並んで腰を下ろした。

丼が置かれると、青木はレンゲを手に取り、スープを一口すすった。

「……これは煮干しと豚骨だな」

わずかに目を細め、淡々と分析する。

一方のモモは割り箸を手に、しばらく固まっていた。

「まあ、これ……どうすれば？」

力加減が分からず、ぎこちなく横に押し広げようとしては失敗する。

「ちよ、違えよ。割り箸も知らねえのか。こうやって縦に割るんだ」

青木が手本を見せると、モモは目を丸くし、ぱちんと音を立ててようやく割れた。

「まあ！　こうして割れるのですわね！　便利なものがあるのですわ！」

子供のように感心して笑う姿に、青木は苦笑しながらも口元を緩めた。

やがて麺をすくい、恐る恐る口に運んだモモ。

次の瞬間、目を見開き、慌てて息を吹きながら声を上げる。

「……っ！　あつっ……！　な、なんて美味しいんですの！」

夢中になってすすり、頬を赤らめながら麺にかじりつく。

「こんなに美味しいもの……はじめていただきましたわ！」

青木はレンゲを置き、隣の彼女を横目に見た。

「……うまいよな。ラーメンって、なんか落ち着くんだ」

ぽつりと続いた言葉は、ふとした告白のように響いた。

「俺さ、母ちゃんを早くに亡くして、ずっと親父と二人暮らしたんだ。親父も大した仕事してなかったから、まあ……貧乏でな」

青木は湯気を見つめ、少し笑うように吐き出す。

「何ヶ月かに一度のご馳走が屋台のラーメンだったんだよ。でも、うちは一杯しか頼めなくてさ」

モモは箸を止め、真剣に青木の横顔を見つめる。

「親父はタバコをふかしながら俺が夢中で食ってるのを見てた。あんなに優しい顔、あ那时候だけだったかもしれないねえな」

青木の声には懐かしさと、にじむような苦笑が混じっていた。

「だからさ、俺が働き出して金が使えるようになったら、親父にたらふくラーメン食わせて、好きなタバコだって山ほど買ってやろうって思ってたんだ」

箸を握る手が止まる。

「……でも、親父までさっさと死んじまって。結局、何もしてやれなかった」

ぶつきらぼうに言い放ちながらも、その声音の奥には深い寂しさが滲んでいた。

モモはただ黙って、彼の言葉を胸に受け止めるしかなかった。

しばらく沈黙が落ち、やがて青木はふっと視線を外し、口を開いた。

「帰国子女って、わけわかんねえと思ってたけど……お前は、まあ、よく頑張ってるよ。俺のアシスタント、どいつもこいつも続かなかったのに」

湯気の向こうで交わされたその言葉は、夜の屋台に静かに溶けていった。

「……けどな。お前は、もう担当外れろ」

「えっ？ どうしてですか？」

「……バカ正直すぎんだよ」

吐き捨てるように言ってから、彼は煙を吐き出した。

「どうせ言ってもわかんねえだろ。とにかく俺が一人でテック社やる。明日から、お前は社内でシュレダーと書類整理しとけ、な」

数日後。

テック社との打ち合わせに向かう青木の背中を、モモはただ見送るしかなかった。声をかける勇氣も出ず、置いていかれた寂しさにその場に立ち尽くす。

そんな様子を横目に見ていた女子社員のひとりが、そつと声をかけてきた。

「モモちゃん……あんまり青木と仲良くしない方がいいよ」

「えっ……どうしてですか？」

女性社員は声を潜め、周囲を気にしながら言葉を落とした。

「……昔ね、アイツ、同僚の女の子を妊娠させたことがあるの」

「っ……！」

「しかも責任も取らずに、その子だけ会社を辞めちゃったのよ。ほんと、サイテー野郎なんだから。だからみんなから嫌われてんの」

冷たい響きを持つ言葉に、モモの胸はきゅっと締めつけられた。

けれど——思い返す。

仕事の間で見せた鋭い眼差し。

不器用ながらも何気なく助けてくれた仕草。

モモの知っている青木は、そんな「最低な人間」だとはどうしても思えなかった。

昼休みのざわめきの中、モモはカップに残ったぬるいコーヒーを見つめていた。

——「青木さんを通さず、直接お会いしたい」

テック社からのそのメールは、モモにとって思いがけない救いのように響いた。

（ここで手柄を立てれば……私だって青木さんのお役に立てるはずですわ！）
出張で青木が不在なのをいいことに、モモは胸を張って返信した。

「もちろんですわ！ 私、お相手いたします！」

その日も高橋が車で迎えに来たが、モモはにこりと笑って告げた。

「今日はお家に帰ってちょうだい。大丈夫ですわ、私ひとりで参りますから」

「……お嬢様、本当に……？」

不安げな高橋の声を振り切り、モモは一人でテック社の担当者と落ち合った。

「二人でゆっくり話せるところに行きましょう。企業秘密ですからね」

そう言って連れて行かれたのは、街の外れに建つ小さなビルの一室。

扉が閉まった瞬間、モモはきよろきよと周囲を見回し、無邪気な声をあげた。

「まあ……喫茶店にしては、ずいぶん大きなベッドがございますのね。今どきは、休憩もできる喫茶店が流行っているのでしょうか？」

その間拔けな言葉の直後、背後から伸びた腕が彼女の肩を乱暴に押さえつけた。

「——えっ……？」

困惑の声を上げた瞬間、ベッドに乱暴に押し倒された。

「ちよ、ちよっと……？ ど、どういふことでしょうか……？」

きよとした瞳に、ようやく危険の色が浮かぶ。

「いやあっ……や！ ……やめてくださいっ！」

必死に身をよじるが、のしかかる男の重さはびくともしない。

スカートを雑に捲られ、下着を無理やり脇へと押しつけられる。

冷たい空気に晒された秘部がひくんと震えた。

「や、やだっ……見ないで……っ」

涙声で抗えば抗うほど、男の目はいやらしく細まる。

「ツルツルじゃねえか……毛が一本もねえなんて、まるでガキのまんこだな」

「やめて！ 見ないで！ 見ないで！」

閉じようとした両腿をがっちりと掴まれ、強引にこじ開けられる。

ぬるりと割れ目を舐め上げられた瞬間、モモの身体がびくんと跳ねた。

「んああっ……舐めちゃ……いやあああっ！」

舌が割れ目を這い回り、蜜を吸い上げる音が部屋いっぱい広がる。

クリトリスを捕らえては吸い上げ、舌先で突き、時に弾き飛ばす。

「やつ……いやっ……だめえっ……やめてえ……っ！」

腰骨から太腿までがっしりと押さえつけられ、逃げ場はない。

自分の恥ずかしい場所で、男の頭が上下に動く様子に気が遠くなる。

「やめろって言いながら……ほら、溢れてきてるじゃねえか。ツルツルのまんこが
びちゃびちゃだ。大人しそうな顔して、実は淫乱だろ？」

「ちがっ……違います……っ！ いやあっ……！」

クリトリスが強く吸い上げられるたびに、腰は勝手に浮き上がる。

舌で転がされ、唇に啜られ、ぐちゅぐちゅと淫猥な音が鳴り止まない。

涙と嗚咽が混じった声がこぼれ、足先から力が抜けていく。

「つるつるのおまんこ……舐め甲斐ありすぎて止まんねえな」

「やっ……やめて……っ！ 気持ち悪いっ！」

じゅるっ、ぐちゅっ、ちゅぱっ……。

淫らな水音が室内に響き渡り、クリトリスを強く舌先で弾かれた瞬間。

モモの身体がびくんと大きく跳ねた。

「ひあっ……ああっ……な、なんですのこれっ……！　だめっ、だめええっ！」

下腹がきゅうつと熱く収縮し、抗いようのない震えが全身を駆け抜ける。

それが何なのか理解できず、ただ必死に拒絶の声を重ねるしかなかった。

「やめて！　……おかしい……身体がおかしくなっちゃう……っ！」

腰は勝手に浮き上がり、シーツを握る手はぶるぶると震える。

涙が頬を伝い、嗚咽まじりの声が途切れ途切れに漏れた。

「ほら見ろ……嫌がってても、舌で弄られりやこんなにとろけるんだ」

「ちがっ……ちがいます……っ！　こんなの……知らない……いやあぁっ……っ！」

「へへっ……たっぷり濡れやがって。世間知らずのお嬢ちゃんをつるつるまんこ、

これから本番だ……」

熱く硬いものが、濡れた花卉にぐいっとな押し当てられる。

「ま……待ってくださいっ！　そんなの……入るはずが……っ！」

次の瞬間——怒張が奥まで突き刺さり、モモの身体を貫いた。

「ひぎやあああつ——！ あああつ……！ 痛つ……痛い——！」

裂けるような鋭い痛みと、下腹を突き上げる異物感。

シーツを掴む指が白くなるほど震えた。

「おいおい……キツすぎて、ちんぽが締め上げられる……っ！」

大きく足をこじ開けられ、モモの身体は容赦なく犯されていった。

「いやっ……抜いてっ……お願いですっ！ ……お腹、壊れちゃう……っ！」

腰を逃がそうとしても、両膝をがっちりと掴まれ、逃げ場はどこにもない。

「おいおい……処女かよ、お嬢ちゃん。こりやラッキーだな」

寧猛な笑い声とともに、怒張がさらに奥を突き破った。

「ほら、痛えんだろ？ でもまんこはしっかり啜え込んでやるぜ」

「ちがっ……そんなはず……っ！ 痛いのに……っ、なんで……身体が……っ！」